

---

DEAR...

サビバケツ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DEAR . . .

### 【Nコード】

N2358B

### 【作者名】

サビバケツ

### 【あらすじ】

【同じ事を同じようにして何が楽しいの？】と、問い掛けはやがて虐めの対象となり、彼女に降り注いだ。錯乱状態に追い詰められた彼女は【信用できるモノ】と出会う。

ねえ、この世には  
綺麗なものばかりなんだね

薄汚いヌイグルミは  
すぐ見つかって捨てられてしまうの

知ってる

分かってるから

孤独でいることと

孤独になることと

分かってるから

もう私に

かまわないで

¢

何故人は同じものを同じように、繰り返し繰り返すのだろう。

誰かが横に振り向けば皆振り向くし

誰かが笑い出せば皆も笑い出す。

何故同じものであろうとするのだろう。

違う人間なのに。

せせら笑いの声。

まわされてきた手紙。

複数の人に書かれた、滑稽な文。

【シネ【ブス！】馬鹿【にきび】ふけ！【デブ】もう来るな！】

ああ、いつの間にか私は対象になっていたんだ。

実に下らない。実に馬鹿馬鹿しい。

私はソレをびりびりにちぎってごみ箱に捨てた。

「ねえ、笹井さん、最近どうかしたの？」

ウェーブのかかったボブの髪が揺らぐ。

同情でしかない眼。正直話しかけないで欲しい。

きつと心情はこうだ、【どうせ、子供の虐めなんて過ぎ去りし事】。

それでも、もし、変わるのならと、幼い心は思ってしまったのだろ  
う。

「いじめられてるんです。ソレが何か？」

先生は悲しそうな顔をした。

「そんな事いわないで。

ほら、どーんって机くつつけて皆で仲良くしましょうよ」

それができたら。

今の私はいないでしょう？先生。

もう絶対、一生、先生を信用する気になてなれなかった。

「もしもこの世に信じれるものがいたら良いのに。」

「いるだろ？ひとりぐらい。別にその辺の猫とかでも構わないんだろ？」

「ああ…そうね。じゃあ貴方にしておくわ」

「はい、笹井さん。こないだいったスケッチブック。これあげるよ」

「え？」

「ほら、書く用紙もってないっていったじゃん？これあげる。うちもちよこつとかいちゃってるんだけどさ。これにかいてうちに見せてよ、絵」

部活の先輩は私を私と見てくれた。

クラスからの拒絶は、次第に悪化して私はクラスに近寄らなくなつた。

そんな時でも、先輩たちは何も変わらず、接してくれた。

「絶対描いてこいよ？テスト終わったらみせっこだ！」

そういわれた。そう渡された。

嬉しかった。

信用する唯一のあの人にたくさん、たくさん、話した。

何を描こう。何を描いたらすごいといって貰えるだろう。

嫌われないかしら。下手といわれないかしら。

たくさん心配をこぼした。

テストの試験中も、クラスから気をそらすことが出来た。  
なのに。

「・・・・・・・・。」

荒らされた家の机。

無くなった画材と、スケッチブック。

私は走って、走って、ゴミ捨て場に行った。

あるはずが無いのに。

朝、出したにきまつてるのに。

「…お母さん…スケッチブックと画材…シラナイ？」

「捨てたわよ」

「何で？」

「あんた、成績分かって絵かいてるの？あんな成績とって置いて絵？！」

「ありえないわね。どこにいくつもりよ！！」

くずれ墜ちてゆく。

私は私室に入ると、机に放られて出されていたカッターに手を伸ばす。

もう、何も、無いんだ。

何も、必要ないんだ。

どこにもいけないんだ。

居場所なんてなかったんだ。

誰もいないんだ。

助けなんて無いんだ。

助けて欲しかったんじゃないんだ。

救って欲しかったんじゃないんだ。

誰も振り返らない。

言葉だけが残ってゆく。



私は独りだったんだね。

涙が零れ落ちた。

もう全部流しきったと思っていたのに。

もう、枯れてしまったと思っていたのに。

ばさばさと切った髪。

赤い液体が零れおちる足。

痛い。痛いよ。

「くずれちまえ。倒れちまえ。気がすむまで泣いちまえ。

声堪えてても、意味無いだろ。息して吐いちまえ。

もう、お前、いっぱい傷ついたんだから」

彼がいつてくれたように。

私はその日ずっと泣き崩れた。

次の日、ばさばさな髪はクラスでコソコソと囁かれた。

今日回ってきた手紙は【不潔！】【汚い！】などの言葉が増えた。

だけれど、何故かすこし心が穏やかになれた。

部活にもクラスにも学校にも、落ち着く場所なんてなかったのに。

「独りでも構わないんだよ。俺だつて独りだ。

だけど寂しくなっちゃいけないんだ。

寂しいと、本当に独りになっちゃう。」

「私は十分だよ。貴方がいるから。

だから生きてるんだ。死んでも良い存在なんだから」

「俺の為に生きるな。

俺が此処にいるからじゃない。

お前がそこにいるから俺が此処にいるんだ」

私は次の日学校を休んだ。

母さんには「いきたくない」といった。

正直、休みたかった。休息をとりたかった。

バサバサの髪を鏡で見て、

美容院に行ってみようと思った。

そつえばボブショートなんて、小学校中学年以来だ。

あの人にも相談してみた。

「ベリーショートのカウボーイにしてこいよ」と笑われた。

季節は冬の終わりだった。

「いきたくない」といった言葉で、

母親は成績の事をひどく攻めなくなった。

ベリーショートのカウボーイが、

やがて、切欠となって虐めから解放された。

2年のクラス替えで、私は友人が出来るようになった。

人間不信は…まだ、今でも残りつつあるけれど。

あの方はそれ以来会えなくなってしまった。

いま何処にいるのか、何処で見ててくれているのか。

彼は、誰だったのだろう。

励まさず、けなさず、笑わず、情けをかけず、それでもずっと傍にいてずっと話を聞いてくれた。

一度彼は私に言った、「俺は、抜け殻なんだ」と。そのときは分からなかった。いまでもわかっていないと思う。

貴方は貴方であって、私であつた。私は私であって、貴方であつた。

全くの違う者同士だけれど、同じ者として近くにいたんだ。

消えてしまった心。  
消えてしまった彼。

だけれど残ってる。  
私は、貴方にずっと会っていたんだ。

貴方という存在に。

ペンはなぞる。

水色のレター用紙の上を。

窓の外では他のクラスが体育の授業をしている。  
今は国語の授業だ。余所見がばれることはない。

最初の一文を私は思いついたように。

丁寧に。書き上げた。

DEAR MYSELF (親愛なる貴方へ…)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2358b/>

---

DEAR...

2010年12月4日14時11分発行